

あけましておめでとうございます。

リオ五輪が盛況のうちに閉幕し、2020年の東京五輪に向けて秒読みが始まった。放送局も乗り遅れることなく、4Kのロードマップを睨みながら、ネット同時・見逃し配信サービスの拡充、FM補完放送による新リスナー開拓など、生き残りをかけて多様化するニーズに対応していかなければならない。

一般的にはそんな言葉で始まる新年の挨拶。でもそんな言葉でいいのかなという違和感がどこかぬぐいきれない。

欧州連合EUからの英国の離脱や米次期大統領選でトランプ氏が勝利するなど、世界経済の先行きには強まる不透明感。また国内では、これまでの働き方が根本的に見直しを迫られるなど、社会全体の構造転換も待ったなしの状況。

さて何を新年のあいさつにするか？

締め切りに追われていたちょうどその頃、JNNの近畿中四国ブロックの社長会があった。視聴率、HUT、収支決算の状況は各局によって明暗を分け、会議が淡々と進む中、それぞれの局が「今年はこんなことやった、来年はこんなことをやっていく、こんなことに向かう」という番組やイベントに取り組む話題に、会議が少しづつ活気づいていく。

RCCは広島カープのコンテンツの広がり、RSKは周年の地元のドキュメンタリーに向かう強き姿勢を、KUTVが来年の維新博の取り組みを。ITVは地元「俳句甲子園」のかつてなき熱き盛り上がり（『プレバト！！』夏井先生のおかげで応募が27倍になったとも）。

MBSは65周年事業「ドリームズ・カム・クルーズ」での放送（RKB・MBCとのコラボも含めて）を話題にし、報告した。BSSは、まさかの鳥取の震災に向き合った昨年の各局の応援の感謝と、いつ来るかわからない大災害に放送局がいかに対応し得るか、その実感に皆真剣に耳を傾けていた。それぞれのローカル局は、地元地域の置かれている厳しき今の状況を背負いながら、そこにしかない文化、歴史と共に地域の人たちと明日に向かっている。

突き詰めていけば、我々の民放の存在意義は、放送活動により地域の人々の生活と命を守ること。この社会的使命の重さを背負った仕事に向かう姿勢。そして地域に信頼され支持される番組やイベントを創出し、その地域の文化を守り、生み出していくこと。そんな当たり前のことを、今更ではあるが実感し、背中を少し押されたひと時であった。

そして、認定放送持ち株会社に向かうこの年。

今一度、我々全社員ひとりひとりが、「自分は“MBSのDNAを受け継ぐ放送人”である」ということを強く意識して、常に地域に向かい合って、ゼロから1を作り出していき新しい1年を踏み出してほしいと思う。人々の気持ちは今、どこにあるのかを絶えず考えながら、MBSにしか出来ないことに向かっていくこと。それを強めていく自信とプロ意識。それは、今の仕事を誇り、放送業界の夢に、明日につながるものでありたいと切に思う。

今年も一緒に頑張っていきましょう。この一年よろしくお祈りします。